

2. Pierre JONIN “*Les Personnages Féminins dans les Romans Français de Tristan*” Faculté des Lettres Aix-en-Provence 1958
3. Pierre JONIN “*Le Roman de Tristan*” Champion 1974
4. Pierre JONIN “*Les Lais de Marie de France*” Champion 1977
5. Félix LECOY “*Le Roman de Tristan par Thomas*” Champion 1991
6. J. C. PAYEN “*Tristan et Yseut*” Garnier 1974
7. Jacques RIBARD “*Le Moyen Age Littérature et Symbolisme*” Champion 1984
8. 新倉俊一 神澤栄三 天澤退二郎 共訳
『フランス中世文学集』 1巻 3巻 白水社 1990年

なおテクストゥとして次の書物を使用した。

1. D. BUSCHINGER “*Eilhart Von OBERG Tristan*” Göppingen A. Kümmerle 1976
2. Ernest HOEPFFNER “*La Folie Tristan d'Oxford*” l'Université de Strabourg 1943
3. Ernest HOEPFFNER “*La Folie Tristan de Berne*” Société d'Edition : Les Belle Lettre 1949
4. Ernest MURET “*Le Roman de Tristan Béroul*” Champion 1957 C. F. M. A.
5. Jean RYCHNER “*Les Lais de Marie de France*” Champion 1977 C. F. M. A.
6. Bartina H. WIND “*Les Fragments du Roman de Tristan Thomas*” Librairie Droz 1960
7. 石川敬三訳 ゴットフリート・フォン・シュトラースブルグ作『トリスタンとイゾルデ』 郁文堂1976年
8. 天澤衆子訳 『もの狂いトゥリスタン』 思潮社 1992年

ルクの影響の及ばない唯一の聖地であり、また、ブランガンの影響も及ばない地である。つまり、ここでイズーにおいて生まれて初めて、《母親》からの自立が実現されるのである。そしてこの聖地に閉じこもり、住むところとて無く食べ物にも着る物にも不自由する毎日を送り、修行を重ねることで自らの過ちではない自分たちの原罪を、彼らは浄化する。そして無事それを完了した時に、3年あるいは4年の歳月が流れているのである。ここにおいて、媚薬の期限を切る必要はなかったことは明白である。

こうして、隠者オグランは、神の使いとして原罪の消えたトゥリスタンとイズーをマルクのもとに返す。しかし、ブランガンはまた母親としてイズーを迎え、トゥリスタンが追放されたにもかかわらず、イズーと密会をしに足繁く通ってくる手助けを始める。罪深き《母》としてのブランガンの復活である。

物語のさいごで、トゥリスタンがブルターニュで傷つき、イギリスにいるイズーを治療のため連れて来て欲しいとカエルダンに頼む。カエルダンは船を仕立て、イズーに会いに行くが、このときも同行を頼まれたイズーは、いつものようにどうしたらよいか分からずに、ブランガンに相談に行く。(Thom D 1493, 1494)『しかし、ふたりでさんざ話し合った末、旅支度を整え、カエルダンに同行するとの結論を得た。』

(Thom D 1509, 1510)

I tant unt parlé nequedent

Conseil unt pris al parlement

Qu'elles lur eire aturnerunt

E od Kaherdin s'en irrunt

こうして、ブランガンを最後まで頼っていた

イズーは、この船旅を終えたとき、嫉妬に駆られたトゥリスタンの妻白い手のイズーの、腹黒い陰謀に嵌まってしまう。すなわち、金髪のイズーを無事連れて来たときは白い帆を揚げるように、駄目なときには黒い帆をという約束で、白い帆を高々と張ってイズーを乗せて近づいてきた船を、白い手のイズーはトゥリスタンに帆は真っ黒であると嘘をつくのである。その知らせを聞いて、トゥリスタンは死んでしまい、上陸したイズーもトゥリスタンの亡きがらの横で死んでしまう。こうしてこの激しくも、間違いじみた悲恋は幕を閉じるが、ブランガンの《母親》としての役目もここに終わるのである。

おわりに

ブランガンは飲み物を飲ませてしまうという、自罪をおかし、その罪滅ぼしのために生涯を捧げた。イズーの身代わりとして、新婚のマルクのベッドウに乙女の花を散らし、その結果、秘密を握る者としてイズーに殺されそうになっても許し、トゥリスタンとイズーとの狂愛の手助けのために、その明晰な頭脳を駆使してマルクの取り巻きたちの様々な策略から逃れ、常に恋人たちの完璧な、しかも唯一の味方として行動し続けたブランガン。

わたしはこの物語に、自罪者としての侍女ブランガンの悲しい性を見るのである。

参考文献

1. Alfred EWERT "The Romance of Tristan by Béroul" Basil Blackwell, Oxford 1971

Mar vos vi onques, damoisele!”

と、トゥリスタンは、ブランガンを責めるが、もう遅い。一度飲まれた葡萄酒は、もはや杯には戻らない。

こうして、トゥリスタンとイズーの宿命の恋は始まる。そして、その幕を切って落したのは、なにを隠そう侍女ブランガンその人なのである。トゥリスタンとイズーに責任はない。それはベールールにおいても、トマにおいても、また、ドイツの作品においても、すべて彼らの恋は、ふたりの責任ではなく、ただこの飲み物を間違えて飲んでしまったからなのである。この媚薬、それを運んできたのは、ブランガンその人なのだ。

『あの飲み物の中には、わたしたちの死があった。あれを飲んでからというもの、心が安らいだためしはない。』

El beivre fud la nostre mort.

Nus n'en avrum ja mais confort :

(Thomas Douce 1223~1224)

と、トゥリスタンはカエルダンに言うが、トゥリスタンとイズーのふたりにとっては、まさにこの世からあの世への移動に匹敵するひとつの死だったのである。

トゥリスタンとイズーは、あの飲み物をふたりに飲み干した瞬間に、地獄に落ちた。この媚薬は、リバールの言う原罪 (péché originel)、禁止の背反 (transgression d'un interdit) であるが、彼らには、罪の意識はまったくない。彼らはブランガンを責めるだけである。一方ブランガンは母親がわりとして、花嫁に付き添いながら、母親が最も望まなかった方法で、イズー

に仕えることになる。イズーの身代わりとして、初夜の床で乙女の花を散らし、マルク王の目を掠めての、トゥリスタンとイズーの逢瀬の手筈にやっきになり、言い訳、言い逃れの言葉を求めて明け暮れる日々。しかし、取の返しのつかない罪を犯したブランガンにとってはこの罪滅ばしこそ、彼女の存在理由なのである。そして、マルク王を言いくるめ、宮廷を欺き、ただひたすら、イズーとトゥリスタンの狂った愛を続けさせるために骨を折る。だって、ふたりを一緒にさせておかなければ、恋人たちは本当に死んでしまうのだから。渦潮に巻かれ溺れかかったひとのように、有無を言わせず運命にもてあそばれたかわいそうなふたり。でもブランガンはイズーの幸せだけを願って、ひたむきに生きる。

ある時とうとう罫に嵌められたトゥリスタンとイズーのふたりは、ベッドウインの現場を押さえられ、マルク王に火炙りにされそうになる。刑場に行く途中で、断崖絶壁から飛び降りたトゥリスタンは、神の起こした奇跡のおかげで命拾いをし、マルクにより癲人に引き渡されたイズーと共にモロワの森に駆け落ちをする。このモロワの森への移動は、トゥリスタンにおいては奇跡的な跳躍であり、イズーにおいては、神に選ばれた癲病患者という、双方共に、神を媒介にして行われる。このとき、ブランガンは置いてきぼりをくうのである。ここにおいて、モロワの森にブランガンがついていかなかったことは、非常に象徴的な意味を持つと思われる。つまり、ブランガンは飲み物を間違えて飲ませてしまった罪＝自罪 (péché actuel) : 原罪に対して自分で犯した罪、を犯したものとして、神によりモロワの森へ入ることを拒否されたのである。モロワの森は恋人たちにとっては、マ

De plusors herbes mout divers : Fb 316

『この飲み物は、かように調合されていた。これを一緒に飲んだ男女は4年間離れ離れには暮らせない。欲望を断とうとしても、愛し合わずにはいられない。』(Eilhart 2279~2285) という飲み物である。ベルールとアイルハルトゥでは、それぞれ、3年または4年と媚薬の有効期限が限定されている。

母親がブランガンに託したこの樽(ゴットゥフリートゥではびん)、ほれ薬の入ったこの器は、何を象徴するのだろうか？ここに、この物語の鍵が隠されているのだ。

それは、イズーの母親が、その秘法を駆使して作り出した、様々な薬草入りの葡萄酒すなわち媚薬の入った樽である。それを、決して誰にも触らせるなど、彼女はブランガンに直々に託す。母親としてはおそらく自分自身がそれを持って花嫁に同行したかったのであろうが、遠い異国に嫁ぐのでは、それもできない。母が娘を愛すればこそ、娘の幸せを願えばこそ調合した飲み物。これを、母の親戚にあたる、ブランガンが、うっかりして、間違ったカップルに飲ませてしまった。ジャック・リバル J. RIBARD氏によれば、媚薬は『魔術的ないし霊的な超能力』(puissances supérieures, magiques ou spirituelles)なのだが、このアイルランドの魔女のような母親はトゥリスタンとイズーが憎からず思っていることを密かに感ずいて、マリー・ラ・ジュイーヴよろしくワインを入れたお鍋をかき回して、薬草を煎じた。これを、マルク王とイズーに飲ませれば、イズーが幸せになると信じて...

ここで、飲み物の樽は《母親》を具現する。

すなわち、この樽は《母親》である。《母親》は飲み物となって、ブランガンに託されるのである。その時点で、ブランガンはイズーの《母》となるのである。

ところが、そんな、大切な飲み物を船上で誤って、トゥリスタンとイズーは飲んでしまった。この飲み物を注ぐのは、アイルハルトゥでは、若き娘(junckfrolin Eilhart 2344)、ゴットゥフリートゥでは、年端もいかぬ侍女のひとり(11645~11706)であり、『もの狂いオクスフォードゥ本』(Fo 649)では、小姓(un valet)と、いうことになっている。ところが、『もの狂いベルン本』では、ブランガン自身が、運んでくる。『それに、ブランガン、あれを持ってきたなんて、まったくドジなことをしてくれたものだ！』

(Fb 314, 315)

Et vos, Brangien, qui l'aportates,

Certes, malemant exploitates.

『あなたの目の前にいるブランガンが、船荷のところへ走って行き、うっかり間違えてしまったのです。ブランガンは、その飲み物で杯をみなみと満たしましたが、それは澄み切っていて、カスなど微塵ありませんでした。わたしは差し出されたので、飲んだのです。(中略)それにしても、ブランガン、そもそもあなたに逢ったのが身の不運だった。』

(Fb 431~439)

"Brangien qui ci est devant toi

Corut en haste au trosseroil ;

Ele mesprist estre son voil.

Do buvrage empli la cope,

Mout par fu clers, n'i parut sope.

Tandi lo moi et je lo pris.

(omission)

母親の王妃は出港に際してトゥリスタンを呼び、イズーとブランガンふたりの保護を頼む。

『イズーの母君の王妃様が私のところにおみえになり、あなたの右手を取られ、直々に、あなた方を私の手に委ねられた。思い出す筈だ、きれいなブランガン。母君は、イズー様とあなたを私に託され、あなたがたから目を離さないように、出来る最高の世話をするようにと、それは繰り返し繰り返し私に懇願された。『もの狂いオクスフォードゥ本』 (Fo 631~638)

La raine, quant a mei vint
E par la destre main vus tint,
Si me baillat vus par la main.
Menbrer vus dait, bele Brengain :
Ysolt e vus me cumandat.
Mul me requist, bel me priat
K'en ma quarde vus receüsse,
Guardasse al melz ke je pëüsse.

アイルハルトゥと『もの狂いオクスフォードゥ本』では、イズーを婚礼のためにイギリスに連れて行くときに、母親はブランガンに飲み物を持たせる。これは、マルク王とイズー王妃の新婚のお床入りのおりに、新郎新婦の愛を確固たるものとするために、ブランガンがふたりに飲ませるはずのものであった。

『母君は、ある飲み物を取り出し、次のように言った。『愛しい人、お願いだから、この飲み物を持って行って頂戴ね。お前以外のだれにも触らせてはいけませんよ。コルヌアイユの国に着いて、あの娘とマルク王様がいざお床入りとなった時に初めて、おふたりにこの飲み物を注いで差し上げて、おふたりですっかり飲み干してしまわれるようお願いするのですよ。決

して、他の人がこれを飲まないように、くれぐれも気をつけて下さいね。』

(Eilhart 2264~2277)

トゥリスタンはブランガンにいう『そのとき、母君はあなたに樽を預けられた。大きいものではなく、むしろ、小さな樽です。そして、自分にかわいがってもらいたいなら、樽の番をしっかりとするようにとおっしゃった。』

『もの狂いオクスフォードゥ本』

(Fo 639~642)

Lors vus baillat un costeret,
N'ert gueres grant, mes petitet.
Dist ke vus ben le guardissez,
Cum s'amur aver voliez.

この樽の中身の呼び方はさまざまで、飲み物 (boivre 2219B Fo, Fb; beivre 1221 Thom; baivre 461 Fo; tranck 2294, 2298 etc) 毒薬 (poison 2206B) ハーブ入ワイン (vins herbez 2139, 2259B) ワイン (vin 2133B; vins 2144 win 2343, 2351E) ラヴドゥリンク (lovendrins 2139B; lovendrants 2159B) などで、作ったのはイズーの母である。

『この媚薬、ハーブ入りワインは、イズーの母の王妃さまが煎じました。マルク王と娘のイズーのために、3年の間、ふたりが愛し合うように作ったのです。』 (Bérout 2138~2141)

Li lovendrins, li vin herbez :
La mere Yseut, qui li bolli,
A trois anz d'amtstie le fist.
Por Marc le fist et por sa fille :

『あの飲み物は様々な薬草から作られていた。』

(もの狂いベルン本)

Cil boivres fu fait...

『どんなふうに、あの方を、満足させて差し上げたらいいのかしら?』(Fb 563)

El dit : " Quel aise li feron ? "

と、イズーが聞くと、ブランガンは、『時間の許す限り、あの方に、誠心誠意お尽くし申し上げて下さいまし。マルク王様が、河での獵からお帰りになられるまで・・・』

(Fb 564~566)

— Tandis con vos avez loisir,

Molt vos penez de lui servir,

Tant que Mars veigne de riviére.

と、助言をする。ここで、ブランガンは姉のような役割だ。

また、違うところでは少し口うるさいブランガンを見ることができる。

ブランガンは、イズーの部屋にキチガイに変装したトゥリスタンを連れて行くが、イズーがトゥリスタンと分からずに冷たい素振りなのを見て口をはさむ。

『奥方様、今だかつて存在せず、また今後も二度と出現不可能な程忠実な恋人に、なんというなさりよう? 王妃さまへの愛が、あの方を死ぬほど苦しめたのですよ。ぐずぐずしないで、両の腕であの方の首に抱き着かれなさいまし。王妃さまのために、キチガイを真似て頭を剃られたのです。王妃さま、この件に関してはどうか、わたくしの申すことに耳を傾けて頂きたいのです。誓って申しますが、この方はまさしくトゥリスタン様です。』(Fb 358~365)

"Dame", fait ele, " quel sanblant

Faites au plus loial amant

Qui onques fust ne jamais soit ?

Vostre amor l'a trop en destroit.

Metéz li tost vos braz au col. /

Por vos s'est tonduz conme fol.

Dame, entandez que je i di :

Ce est Tristans, gel vos afi" .

また、『もの狂いトゥリスタンオクスフォード本』では、

『お口を謹まれてくださいまし、奥方様』、ブランガンはそう言って、『奥方様は、今ではすっかり意地悪になりました。そのような振る舞いを、どちらで身につけられたのでございますか? なんとまあ悪口がお上手でいらっしゃいますこと。』と続けた。(Fo 591~594)

"Taisez, dame", o dit Brengain,

"Mult estes or de male main.

U apreïstes tel mester ?

Mul savez ben escuminger. /

このようなたしなめ方は、侍女の領分を逸脱しており、それは、完全に母親あるいは姉、保護者の口ぶりである。

ブルターニュからイズーに逢いにきて追い払われたトゥリスタンが病気になったとき、ブランガンはカエルダンのことで腹を立てていて協力を断る(前出)。すると、

『気高き乙女よ、トゥリスタンとわたくしを可哀想と思ってください!』と、イズーはブランガンに哀願する。(Thomas D 662,663)

"Franche damisele,

Ove Tristran vus cri merci. /"

ここで、反対にイズーはブランガンに娘が母にするように許しを乞う。

そもそも、ブランガンはイズーのマルク王への嫁入りのおり、アイルランドウから、ペレニスという男の従者とともに、イズーの侍女として、イギリスに渡ってきたのである。

(Les Personnages Féminins dans les

Romans Français de Tristan P 272)

そして、トゥリスタンとイズーの不倫を告げる代わりに、美男で女たらしのカリヤド伯がイズーを口説き落とそうとしている。と、嘘をつく。それどころか、トゥリスタンを褒めそやす。

『なぜなら、トゥリスタン様は武勇に優れ、教養あふれる方です。しかも、王様、あなた様の甥御様でいらっしゃるのですよ。そのうえ、そうやすやすとは見つけれない貴重なお友達なのです。』 (Thomas D 458~460)

Car il est pruz e enseigné,

Si est vostre niés, sire reis ;

Tel ami n'avrez mais cest meis."

どうやって、王の信頼を勝ち得たら良いのかをすっかり心得ている、思慮深い政治家たるブランガン。この、演説に感動したマルクは、ジョンナが言及しているように、イズーよりもブランガンを重視して、見張りを頼むほどである。

『イズーの面倒を良く見て欲しい。秘密裏の相談事や隠し事を、領主であろうと、騎士であろうと、お前抜きでイズーとこっそりと話し合うようなことはさせるなよ。お前に、イズーの見張りは任せるから、今後は、お前の責任だ。』

(Thomas Douce 471~476)

"E d'Isolt vus entremetrez.

Privé conseil ne li celez

Ne de barun ne de chevaler,

Que ne sieiez al conseiller ;

En vostre gard la commant :

Cunveinez vus en desornavant.!"

これ程までに、王様に信用され頼りにされた王妃の侍女がいただろうか？かつて、肌着の話

でイズーの心をとらえたブランガンは、こうして王の信頼も勝ち得るのだ。『今や、イズーはブランガンの手の中にあり、ブランガンの言うがままである。こっそりと話をすることも、密かに何かすることもできない。』

(Thomas Douce 477~480)

Ore est Ysolt desuz la main

E desuz le conseil Brengvein ;

Ne fait ne dit privément

Qu'el ne seit al parlement.

王を手玉にとり、イズーを意のままに動かす。ブランガンこそ辣腕の宰相なのだ。

IV 母親としてのブランガン

そもそもイズーという女性は自主性に欠ける嫌いがある。いつも途方に暮れ、ブランガンにたえず助言を求めるのを止めない。

『もの狂いトゥリスタンベルン本』では、トゥリカタンの再認を果たしたイズーは、

『ねえ、ブランガン、なにをして差し上げたら良いのかしら？』 (Fb 557)

Quelles. / Brangien, quel la feron ?

などと、カマトトめいたことを、ブランガンに聞く。あたかも、年端のゆかぬ娘が母親に尋ねるがごとくである。ブランガンは、答えて、

『まあ、王妃様、ご冗談はお止めになって。！どうぞ、とりあえず身にまとう物を持ってきて差し上げて下さいまし。』 (Fb 558,559)

— Dame, nel tenez mie a gas :

Alez si li querez les dras.

と、助言し、するべきことはひとつしかないでしょう、と、言わんばかりだ。

ランガンに呼びかける。

その後、マルク王はふたりにあらぬ疑いをかけたことをイズーに詫び、ブランガンに、和解のためにトゥリスタンを連れてくるように頼む。ところが、ブランガンは『トゥリスタンが自分のせいで、マルク王と仲たがいのしたのだと、執拗にわたくしを亡きものにせんとしている。』

(Bérout 513,514)

Dit par moi est meslez o voz,

La mort me veut tot a estros.

と、嘘を言い、マルク王にとりなしを頼む。嘘をつくのは、おそらく、たいした根拠もなく人の噂だけで、ふたりの仲を疑ったマルク王に、今度は疑が晴れたとして簡単にすべてがうまく行くというものではない、と悟らせるためではないだろうか？案の定、マルクはトゥリスタンの要求をまる飲みする。

それは、アイルハルトゥにおいて、更に次のように発展する。

王は、トゥリスタンに自分を許し、宮廷に留まるようにと頼んでくれと、ブランガンに言う。

マルクにブランガンは、『ここに、留まることが、トゥリスタン様のご利益になるとは思われません。また、同じような災難がトゥリスタン様に起こらないとも限りません。』(E 3720,3721)と、言い反対する。その結果、マルクの次のような約束を取りつけるにいたる。『わしは、トゥリスタンに償いをしたいのじゃ。あの者の寝台はわしの部屋に置き、朝から晩まで、いつでも后といっしょにいることを許そうぞ。』(E 3732~3735)

知能派のブランガンは簡単に和解に持込まないで、トゥリスタンに最大限譲歩し、自分の寝室、すなわちイズーの寝室にいつでも好きなか

け居られる自由を与えるという、マルク王の答を引き出す。

ベルールに戻って、ブランガンは王に、トゥリスタンへのとりなしの確約をさせて、トゥリスタンに会いに行き、『頼まれたからいやいやというふりをなさって下さいな。喜々としていらしてくださっては困ります。』(Bérout 543,544)

Fai grant senblant de toi proier,

N'i venir mie de legier.

と、彼に知恵を付ける。

トゥリスタンとイズーにとってブランガンはもちろん単なる侍女ではないどころか、賢明な秘書、やり手の策略家なのである。

トマでは、前出の、『カリヤドを見て、カエルダンが逃げた。』事件の後の、ブランガンとイズーのこの大喧嘩は、延々と約340行にも及ぶが、最後にブランガンはマルク王にトゥリスタンとイズーの不倫を言いつけると、イズーに告げて、王のところへ行く。『王様に秘密をばらしてしまうと、断言する。』

(Thomas Douce 344)

Jure qu'al rei dire le volt.

が、そのブランガンはマルク王のもとに赴き、次のように言う。(Thomas Douce 352~354)

『わたくしといたしましては、王様ご自身にも、また王様のご名誉にも、忠義と忠誠、誠意と献身的な愛でお尽くし申し上げるべきと存じます。』

Li jance e lealte vus dei

E fiance e ferm'amur

こうした、言葉遣いは、ピエール・ジョナン(Pierre JONIN)の指摘するように、ブランガンは完璧な教育を受けていることが推測される。

Pri vus quel moi pardunisez
 E tresques a Tristvan en algez,
 Can ja mais haitez ne serra,
 Se il a vus parlé nen a."
 Tant la losenge, tant la prie,
 Tant li pramet, tant merci crie
 Qu'ele vait a Tristran parler,
 En sa loge u gist conforter ;

異国にたったひとり嫁いできたイズーの、唯一の友はブランガンなのである。その友がカエルダン事件で誤解して怒り狂い、まったく手がつけられないので、イズーも機嫌を直してもらうのに懸命であった。しかし、こうして、二人は仲直りをし、『愛する身内のひと、ブランゲーネ』(Gottfried 10370 石川敬三訳)『とても忠実で誠実なブランガン (すいかずら Chivrefoil Marie de France 90)

Brenguein, ki mut et bone fei.

は、復活をし恋人たちの悲しい死にいたるまで、変わることない愛を、イズーはブランガンに又ブランガンもイズーにもち続けるのである。

Ⅲ 策士ブランガン

単なる侍女に留まらず、イズーが危機に陥ったときには、必らず適切な解決方法を見つけ出してくれる、そんな女性がブランガンである。

アイルハルトウのなかでは、トゥリスタンの剣の刃こぼれに気づいたイズーが、伯父を殺したのはトゥリスタンに違いないと逆上し、お風呂場でトゥリスタンを殺そうとした時に飛んできて、イズーに冷静に何をすべきか諭すのはブランガンである。

『あなたにふさわしくない人を夫に迎えるより、恨みを忘れる方がずっと簡単ですよ。』

(E1956~1958) ブランガンの落ち着いたこの言葉にイズーとの結婚の権利を主張していたいやな男の存在を思い出し、怒りを静め、トゥリスタンとともにイギリスに行き、マルクの王妃となることを承諾するのである。

『もの狂いトゥリスタン、ベルン本』では、イズーに逢いたい一心で、キチガイに変装しマルク王の宮廷にきたキチガイを、自分の部屋に連れてくるようにと、イズーに命じられたブランガンは、広間に行き、キチガイと話し、彼が、『ブランガンの名前を知っていたこと』『彼の体つきが並外れて美しいこと』『飲み物の話の信憑性』と、いう3つの根拠からトゥリスタンを再認する。賢いブランガンは女主人に先立って、愛人のトゥリスタンを再認することになる。

また、2つの『もの狂いトゥリスタン』において、犬を連れてくるように命じられて、彼女がどちらの場合でも犬の綱を解くのは、キチガイがトゥリスタンであるという確信が、洞察力に優れたブランガンにはあるためである。

(Fb 507) Brangien i cort, sou desloia.

(Fo 905) E le deslie, aler le lait.

また、ベルールでは、松の木の下での密会を事前に小人に気づかれ、マルク王に木の上で見張られていたとき、間一髪これに気づいたイズーはいやいやながら呼び出しに応じた風を装って、トゥリスタンにマルク王の存在を気づかせ、一芝居打って切り抜ける。(前出)

(Bérout 1~285)

蒼ざめて部屋に帰ってきたイズーは、『お師匠さま』(345 Bérout "Bele magistre") と、プ

しい口実に、如才ない手練手管で、カエルダン
事件を、またまた繰り返された。』

(Thomas Douce 26~29)

Cel forpez fud tut pardoné,
Mes ore est il renovelé
Par l'acheisun et l'engin
Que fait avez de Kaherdin.

ブランガンはイズーがカエルダンのことをほ
めそやし、ブランガンの気持ちをカエルダンに
向けさせたことを、非難する。『なんなら、わ
たくしに説明していただけませんか、イズー王
妃様？

いつからリシューになられたの？

ゴロツキを持ち上げて哀れな女をもてあそぶ、
リシューの生業をどちらで身につけられた
の？』(Thom D 54~58)

Ore me dites, reine Ysolt,
Des quant avez esté Richolt ?
U apreïstes sun mester
De malveis hume si apreïser
E de une caitiveïtrai r ?

と、まで言い切る。(リシューというのは、1159
年、1170年、又は1180年代に作られた、悪女伝
の淫売で女衞の女主人公の名前。)

さらに、『あなたと恋人のトゥリスタンに、
仕返しをせずにおくものですか。決闘を申し込
むわ、イズーさん、あなただけでなく、彼にもよ。
わたしに面目丸つぶれの赤っ恥じかかせたお返
しに、ふたりにはたと不幸や災いを招いてあ
げる。』

(Thomas Douce 65~69)

Jon averai ben le vengeance
De vus, de Tristan vostre ami :

Ysolt, e vus e lui deffi ;

Mal en querrai e damage

Pur la vilte de ma huntage.

この言葉に驚愕したイズーは身の不運をこう
嘆く、『わたくしはずっと耐え忍んでまいりま
した。せめて、ブランガンの愛さえあれば、ま
だこれからも辛抱できるのに。』

(Thomas Douce 93~95)

... ben l'ai suffert,

E souffrir uncore le peuse,

Se l'amur de Brengvein eüse.

また、『これほど、けなげで、忠義な乙女は、
かつて存在したためしがないわ。』

(Thomas Douce 108,109)

Si vaillante ne si leele

Ne fud unques mais damisele

と、イズーは、ブランガンを持ち上げ、褒めそ
やす。イズーにとってブランガンがいかに大切
であるかがわかる言葉である。また、その後、
イズーに逢いにきたトゥリスタンが病気になり、
門番に発見された時、イズーはブランガンに
トゥリスタンの世話を頼むが、色よい返事がも
らえないとき、イズーは言う。『わたくしが自
分のしたことで、後悔し苦しんでいるのは確か
なのよ。お願いだから、許して頂戴。そして、トゥ
リスタン様のところに行って頂戴よ。あなたと
お話ができれば、あの方はきっと喜ばれること
でしょう。』

あれやこれやとお世辞を並べ、懇願し、幾つ
もの約束をして、何度も許しを乞うたので、と
うとうブランガンもトゥリスタンの臥せってい
る門番小屋へ、声を掛け元気づけるために出掛
けて行く。』

(Thom D 694~702)

"Peise moi certes que jol fiz.

人たちは愛し合い、一方ブランガンとカエルダンも恋仲になるが、彼らの幸福は長続きしない。嫉妬深い連中に気づかれたトゥリスタンとカエルダンは立ち去る。これを追いかけるカリヤドは、彼らの従者を本人たちと勘違いして挑戦するが、無論相手は一目散に逃げてしまう。王宮に戻ったカリヤドは、卑怯な男を恋人に選んだものだと、ブランガンを面罵する。彼女は激しく心を傷つけられた。ただし、『サガ』では、カリヤドの役を演じるのは、マリヤドック。P353 中世文学全集》 ちなみに、アイルハルトゥではカエルダンは侍女のカミーユを誘惑するが失敗する。

ブランガンは、並の侍女と違い、女主人公と対等に喧嘩をする。

『あなたがたと巡り会った時よ、呪われてあれ！
あなたとあなたの愛人のトゥリスタンに。
あなたのために、きっぱりと故郷を捨て、
そのうえ、あなたの狂愛のために、
奥様、わたくしの処女までも捨てたのです。』

(Thomas Douce 3～6)

Mar vi l'ure que vus cunui,
E vus e Tristan vostre ami.
Tut mun palis pur vus guerpi,
E pus ,pur vostre fol curage,
Perdi, dame, mun pucelage.

また、『あらぬ疑いから、わたくしを亡きものにしようとされたのに、そんなあなたを、なぜ殺そうとしなかったのだろうか？』

(Thomas Douce 24,25)

Pur quei n'ai quis la vostre mort,

Quant me la quesistes a tort ?

と、自分を責める。

イズーは新婚まもなく、情事の秘密を握るブランガンの裏切りを恐れ、2人の男に、彼女を森の奥に連れ出し殺すように命じたのだ。ブランガンは、殺される直前に、自分のしゃべったことを、イズーに伝えて欲しいと次のように言う。『わたくしたちが、母国を後にしたとき、イズー様のお優しいお母君が、ご親切にもわたくしどもに、一枚づつ上等のシャツを下さったのです。(中略) この国に着く前に、イズー様のものが破れ、すっかりぼろぼろになり、王様のお側で堂々と身につけるには、ふさわしくなくなってしまったのです。(中略) わたくしのはまっさらで、手も通していない新品でしたから、イズーさまは、そなたが誠実だからこそ頼むのだと、おっしゃられて、それを自分に貸して欲しいと懇願されたのです。わたくしの意に染まぬことではありましたが、切にお願いされ、結局はお貸ししたのです。』(Eilhart 2932～2947) 男たちは、殺されるような理由は見つからないので、犬の肝臓を証拠にもってイズーのもとに行き、ブランガンの言葉を伝えると、イズーはひどく後悔し絶望し、悲しみで激しく自らを打ち、髪をかきむしる。これを見て、男たちは真相を明かし、ブランガンをつれてくる。イズーは、男たちの智恵で助けられたブランガンに会い、喜ぶと共に、さまざまな許しを乞う。『こう言うと、気高き王妃はブランガンの足元にひれ伏す。』(Eilhart 3042,3043) そして、ブランガンもイズーを許し、『ふたりは抱き合う。』(Eilhart 3061)

このようにして、『この過ちを、すっかり水に流してさしあげたのに、今度は、もっともら

ガンは和解の条件を有利にしようと、マルク王と会話を持つ。トゥリスタンは壁の裏でこの話に聞き耳を立てており、成功をおさめ戸口から、飛び出してきた『ブランガンの腕を握り、彼女を抱き締める。』(Bérout 531,532)

Brengain a par les braz saisie,

Acole la,...

そして、また新たな戦術をトゥリスタンに授けるが、『トゥリスタンはブランガンを抱き締め、キスをする。』(Bérout 547)

Tristran l'acole, si la beise!

『もの狂いトゥリスタン ベルン本』では、ブランガンがトゥリスタンを広間で再認したとき、

『ブランガンはトゥリスタンの足元にひれ伏し、自らの無礼を許してくれるよう、慈悲を乞う。トゥリスタンは手を取り立ち上がらせて、ブランガンに百回以上、幾度も幾度もキスを繰り返すのであった。』(Fb 322~325)

A ses piez chiët, merci li crie,

Qu'il li pardoint sa vilenie.

Cil la relieve par les doiz

Si la baisa plus de cent foiz.

また、カエルダンの妹の白い手のイズーとブルターニュで結婚したトゥリスタンは、寂しさを粉らわせるために、イズーとブランガンの彫像を作らせ、ときどきここにきて愚痴をこぼしていたようであるが、あるとき、ブランガンの彫像に話しかけて言う。(Thomas Turin 30)

きれいな人、君には愚痴がこぼせるね。

"Bele, a vos me plain"

《『サガ』(Saga) 80~81章によれば(ゴットフリートの物語りは、トリスタンと白い手のイ

ズーとの結婚の前で途切れている)、その昔、アフリカから来た巨人が岩を刻んでこしらえた丸天井の洞窟に、トリスタンは、王妃イズーに酷似した等身大の彫像(彼らに害を加えた小人を足で踏みつけている)、愛犬プチ・クリューの像、ブランガン像等を、ひそかに工人に命じてつくらせ、彼女たちの彫像に思いのたけを訴えるのであった。(P353 新倉俊一他共訳 フランス中世文学集)》

さらに、この彫像を見せてもらった白い手のイズーの兄のカエルダンはブランガンに一目惚れし、トゥリスタんとふたりで、イギリスに行くことになる。

『そして、彼らはイギリスを目指す。

イズーに逢いたやブランガン恋し。

カエルダンはブランガンに逢いに、

また、トゥリスタンはイズーに逢いたくて。』

(Thomas Strasbourg 1~4)

E vunt s'ent dreit vers Engleterre

Ysolt veeir e Brengien querre;

Ker Kaerdin veeir la volt,

E Tritan volt veeir Ysolt.

2 イズーもブランガンが好き

その後、イズーとトゥリスタンの熱心な勧めで、ブランガンはカエルダンの愛を受け入れる。しかし、それも長くは続かず、カエルダんが、『女たらしで美男のカリヤド伯を見て、逃げた。』(Thomas Douce 50 Quant pur Kariado s'en fuit,) という話を聞いて、ブランガンは怒りをぶつける。

《『サガ』87,88章によれば、再会のかなった恋

スタンを見つけるのは、善良な (gut) ブランガンであるし、『もの狂いトゥリスタン・オクスフォードゥ本』で、愛犬の様子を尋ねられたイズーは、ブランガンに言う。『ブランガン、今から、犬を連れてきておくれ。』ブランガンは『やおら立ち上がり、小走りにユダンのところにやって来ると、頭を撫でる。』(Folie Tristan d'Oxford以下略してFo 901,903,904)

Brengains, ore alez pur le chen.!

Ele leve e en pez sailli,

Vint a Huden e sil joï また、

再認を受けたトゥリスタンは『水をおくれ、美しいひと。泥まみれの顔をきれいにしよう。』と、言う。すると、『ブランガンがすぐに水をもって来たので、』洗顔をする。(Fo 981~983)

De l'ewe, bele, me baillez.

Lavrai mun vis ki est sullez.

Brengain l'ewe tost aportat.

ベルールの最後のところで、裏切り者のゴドイーヌは、イズーの髪を梳いたばかりでまだ櫛を手にしたままのブランガンを見る。

(Bérout 4417~4419)

Brengain i vint, la damoisele,

Ou out pignié Yseut la bele :

Le pieigne avoit encor o soi.

また、ゴットゥフリートゥによれば、ブランガンはイズーと同様、薬草の知識に長けていたようである。

イズーは、彼女を亡きものにしようとして、病気のふりをしてブランガンに森に行き薬草を取ってきてくれるようにと頼む。

『一行の者が薬草やさまざまの草本が望みどおりたくさんある森へやって来たとき、ブラン

ゲーネはそこで馬から下りたがった。』

(Gottfried 12764~65 石川敬三訳)

すなわち、女主人に命令されれば、直ちに従い、すぐに行動に移す、従順で機敏な侍女だ。また、イズーの美しい金髪を梳き髪形を整えるのも、王妃のために薬草を取りに行くのも彼女の役目だ。ここで、まず第一にブランガンは第一級の侍女であることが、分かる。

Ⅱ 愛されるブランガン

礼儀作法を心得たブランガン (Fo 602 curteise esteit)、『気高きブランガン』(Fo 613 Franche Brenguain)、美しい若い女 (Thomas Strasbourg 38 bele meschine) 『べっぴんさん』(Folie Tristan de Berne以下略してFb 280 Bele) 『きれいなブランガン』(Fo 634 bele Brengain)、『美しい満月の、気品高いブランゲーネ、』(Gottfried 11080 石川敬三訳)、『気品のある聡明なブランゲーネ』(Gottfried 10358 同訳) は、とても美しく、しとやかで礼儀作法を心得ており、また新婚のお床入りでイズーの身代りになってもバレない程グラマラスな肉体に恵まれていたので、イズーにもトゥリスタンにも愛され、カエルダンには熱愛され、マルクでさえも彼女に親しみを感ずるほど魅力的な若い女性であった。

1 トゥリスタンはブランガンが好き

ベルールでは、松の木の下での逢い引きをマルク王に待ち伏せされた、トゥリスタンとイズーは名演技をして、マルク王をだます。その結果、マルク王がイズーに謝罪した後、ブラン

侍女ブランガンのなぞ

トゥリスタン物語におけるイズー王妃の侍女の役割

天 澤 衆 子

Enigma of Brangien

Function of the Lady Attendant of the Queen Iseut in the Tristan Romances

Shûko Amazawa

はじめに

トゥリスタン物語は、アーサー王の騎士トゥリスタンとトゥリスタンの伯父であり王であるマルクの妃イズーとの、かなわぬ恋の物語、今風にいうと不倫物語である。この恋の始まりは、侍女ブランガンがイズーの母親の王妃から預かった花婿マルク王と花嫁イズー王女のために準備された手作りの媚薬—これを飲んだ男女は決して離れ離れには暮らせない。欲望を断とうとしても、愛し合わずにはいられない。(Eilhart2280~2285) という飲み物—を、不注意から、婚礼以前にトゥリスタンとイズーに飲ませてしまったことに端を発する。作品(ヴェルスイオン)により、飲み物を飲んだ場面設定はさまざまだが、イズーの母親の王妃にしっかり管理するようにと預けられたこの飲み物を、うっかり飲ませてしまったことに変わりはなく、ブランガンさえしっかりしていれば、この悲恋物語は存在しなかったといえよう。この物語のもっとも、重要な要素は、この誤飲にあると思われる。しかも、その原因となってい

るのが侍女のブランガンである。このブランガンは、そのことに責任を感じて、物語のなかで、イズーの侍女というより、あるときは親友のような、あるときは姉または母親のような役割を担い、陰になり日なたになり、イズーとトゥリスタンの恋の手助けをする。この女性の存在の謎を解くことが、トゥリスタン物語の謎の解明につながると確信し、ここに筆を取るようになった。

そもそもブランガンは何者なのだろう? ゴットゥフリートゥでは、王妃の単なる侍女ではなく、王族ではないが、イズーの母の王妃イズーの兄のル・モロールトゥの縁者ということになっているが、彼女はじつにさまざまな顔を持つ女性である。

I 侍女としてのブランガン

まず第一に、彼女が有能な侍女であることは、明白である。アイルハルトゥ (Eilhart 1820) で竜退治の後に、沼地に横たわっているトゥリ